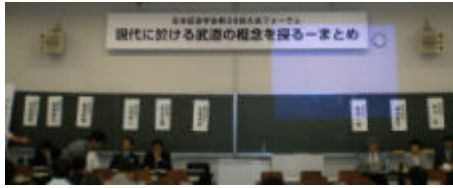


日本武道学会第 39 回大会 Japanese Academy of Budo

平成 18 年 9 月 6 日～7 日 国士舘大学多摩キャンパス
「Think about Budo of the present age」



Budo changed with Budo from Bushi do. It does not belong to Budo when I judge Sumo historically. There is not a reason by work of Samurai. Sumo was a show. Sumo was called the national sport and changed. But it cannot be said that a player of Judo and Katate is a practitioner of Budo.

「現代における武道の概念を探る・・・まとめ」

司会・村田直樹（講道館）

第 37 回大会より 3 年間に渡り武道学研究の根源である「武道の概念」を「競技スポーツとの違い。」「外国人の求めるもの」などのテーマをあげ探求のための一里塚ならんとして進めてきた。

パネラー：藤堂良明（筑波大教授・柔道）山内洋一（崇城大教授・空手道）杉江正敏（大阪大教授・剣道）松尾牧則（国際武道大助教授・弓道）新田一郎（東京大学教授・相撲）福田啓子（皇学館大教授・なぎなた）坂下充（少林寺拳法連盟本部考試員）司会補助：豊嶋建広（麗澤大教授・空手道）

概要「空手・剣道をする者が**武道**をする者ではない！」



藤堂良明（筑波大教授・柔道）：近世に「士の生き方」として士道が意味を持ち近代に富国強兵策に基づく国民道徳が芽生え西久保は、大正 3 年に「武道講和」のなかで単なる武術にとどまらず徳育的意義を強調し「武道」と称すべきであるとした。

山内洋一（崇城大教授・空手道）：空手が変貌をとげたのは、1957 年、第 1 回全日本学生空手道選手権大会からである。また、1981 年に国民体育大会に採用され更に競技化が進んだ。しかし、空手は、「小利主義」という大きな課題を引きづっている。21 世紀は、末端指導者に定義として理解されていない「武道」の概念を明確にし空手道を「限られた人たち！限られた年齢！」のイメージを脱却し 21 世紀には、**教養あるものに確立**したい。



新田一郎（東京大学教授・相撲）：わたしは、歴史学が専門なので歴史的に分析すると相撲 = 武道とするのは、間違いである。もともと相撲は、見世物であり娯楽であり「武士の営為」ではなかった。従って**芸能民と並ぶもの**であった。しかし、「国技」と称されるようになり神事との関わりを深めさせようという働きにより「武道」の価値があるかに見えた。

東大の相撲部の監督であるが「相撲をする人」=「武道をする人」では、ない。武道とは、異なる価値を有するものである。（この発表には、多くの同意が各先生から得られ空手をする人 = 武道ではない！と発言された。）

坂下充（少林寺拳法連盟本部考試員）：真の武道とは、「武道の実体とは？」少林寺拳法をやっている「武道」では、ない。開祖宗道臣は、人づくりをしている「しくみ」があって**真武道を言える**とした。しかし、「しくみ」は、今、開祖の継承でしかない「定義」を明確にする必要がある。

福田啓子（皇学館大教授・なぎなた）：悪い要因とし競技中心主義なっている。しかし、女性に開かれた武道であることは、大いに誇れる。また、「婦徳の涵養」を担う役割をもって教育として導入され国際的にも普及発展させたことは、ジャンダー的側面からも評価は、大である。

司会補助：豊嶋建広（麗澤大教授・空手道）より日本武道学会員によるアンケート分析発表（世界拳法会連盟より浅井隆夫先生、中村昇先生などアンケート協力ありがとうございました）。

イメージ

武 道		vs		ス ポ ー ツ	
成立過程	形式	成立過程	形式	成立過程	形式
和蘭防 日本防 護本防 日本入	防衛 防衛 防衛	アム 防衛 防衛 防衛	防衛 防衛 防衛 防衛	防衛 防衛 防衛 防衛	防衛 防衛 防衛 防衛
競争性	身体性	競争性	身体性	競争性	身体性
防衛的 防衛的 防衛的	防衛	防衛	防衛	防衛	防衛

中島彗木（国士舘大教授：柔道、拳法会顧問）：

武道の共通点は、自己の「中心軸」を確認する身体技法である「自然体」であることは、中村民雄（福島大教授）の論であり同感である。武道指導者の資質の向上なくして意義は、達成できない。

大橋千秋（世界拳法会連盟会長 古武道）：世界がとらえる武道感は、むしろ神格化され崇高なところにある。競技を見て楽しんだり、見てもらって楽しむ、自己の満足の域を脱している。

武道の定義：わが国固有の格闘形式で固有のルール化があり、抑制力をもち、世に貢献できる人材育成をすることが武道である。

There is the special meaning in "Budo". Next is definition. 日本武道学会・世界拳法会連盟 転載禁

It is the Japanese original martial art.

Budo have Japan original action and rule.

Budo restrain oneself and improve another person.

武道学研究 第39巻別冊



日本武道学会第39回大会

研究発表抄録



期 日 平成18年9月6日(水)・7日(木)

会 場 国士舘大学多摩キャンパス



日 本 武 道 学 会

Japanese Academy of Budo

柔道段位制度に関する一考察

—フランス柔道家を対象として—



○飛塚雅俊（了徳寺学園）佐藤宣践、光本健次（東海大学）
溝口紀子（静岡文化芸術大学）西村賢二（JOC）

1. はじめに

■柔道が創始され124年となる現在、講道館柔道は今や日本のみならず、日本発祥のオリンピック種目として世界各国に普及している。しかし近年、競技力の向上により柔道選手の中で「段」に対する意識が薄れている風潮を感じる。
■本研究では、世界一の柔道人口を誇るフランスの柔道選手を対象として段についてのアンケート調査を行い、その結果を考察することで、フランス人の段に対する意識や役割、現状などを捉えることを目的とした。

2. 方法

フランス人柔道家を対象に、150枚のアンケートを実施し、うち有効回答は139枚であった。調査期間は2005年5月から9月。調査内容は、柔道段位規定の認知度、柔道段位の必要性、柔道段位の魅力など25項目から構成されている。

3. 結果および考察

有効回答数は、計139名。

■柔道段位規定の認知度—知っている133名・知らない6名

結果：知っている人の内訳は、先生から聞いて(54%)、連盟から聞いて(31%)、昇段規定を学習して(10%)が主な結果。

■柔道段位の魅力—感じる128名・感じない11名

結果：感じる人の内訳は、柔道の象徴(58%)、気持ちが引き締まる(13%)、強さの象徴(10%)、カッコいい(6%)が主な結果。


■柔道段位が就職時に活用されていると思うか—【警察】思う(41%)・思わない(54%) 【教員】思う(7%)・思わない(62%) 【刑務官】思う(17%)・思わない(35%) 【軍隊】思う(13%)・思わない(42%)

結果：就職時の段位の活用は、警察官でも半数を超えることがなく、その他の教員、刑務官、軍隊などは20%を超える結果とならなかった。

以上の結果より、フランス人柔道家における段位制度の認知度は高く、段位は柔道修行上、明確な成長の証として捉えられている。しかし柔道段位が必要、魅力だと感じていながらも、就職等で活用する機会に恵まれず、フランスでの社会的活用については、未だ問題が残っている。今回の調査により、より良い制度向上に向けての手がかりとして、問題意識を持つことが出来た。今後、柔道段位の社会的地位の向上に向け、更なる発展を期待させる結果となった。

少年柔道「小学生」の色帯に関する研究（その3）

— 保護者を対象にして —

 光本 健次 佐藤 宣践 小河原慶太 今村貴幸（東海大学）

【はじめに】

前回、少年柔道「小学生」の色帯に関する調査「指導者及び各都道府県連盟役員を対象にして（その1・2）」を報告した。指導者は15年以上の経験豊富な男性が多い。またクラブで独自の規定があり、色帯は全国的に統一性がないことが明らかにされた。連盟役員は統一に賛成という意見が見られたが、その反面、昇級料金の徴収では「普及・発展につながらない」などの意見も多く、統一を検討する際の課題もある。色帯については、少年、指導者、連盟役員とも魅力があると強く感じており、級位制度が高く評価されている様子が見えた。

そこで本研究では、前回調査（その1・2）に加え、更に詳細な現状の把握を目的とし、少年柔道の保護者を対象にしたアンケートを行い、普及活動並びに発展の観点から魅力ある級について検討を試みる。

【研究目的・方法】

前回調査に加え、更に国内の詳細な現状の把握を目的とし、小学生の保護者を対象として、少年柔道（小学生）の色帯に関する調査（意識調査、クラブの昇級審査規定の有無、魅力、統一に対する考え方など）を行い、その実態を明らかにすると共に、普及（少年柔道人口の拡大）並びに発展（組織の安定化）のための魅力ある級位制度のあり方を検討する基礎資料を目的とする。

2005年5・9月、全日本少年柔道大会並びに全日本選抜少年柔道大会において、小学生の保護者に対しアンケート調査（性別、地域、経験年数、昇級審査規定の有無、色帯の魅力、統一に対する考え方など19項目）を実施した。調査方法は質問紙法で行い、配布枚数850枚に対し、回収枚数が431枚、全て有効標本（50.5%）であった。集計の方法は単純集計とした。

【結果及び考察】

「保護者の性別」は、男性60.6%、女性38.7%で、試合の観戦は男性が多い。所属地域は関東地区が28.6%と最も多く、2大会とも東京開催のためと推察できる。「家族に柔道経験者がいますか」という質問には、55.0%の半数以上がいると回答しており、柔道を始めていく上で一つのきっかけになっているように思われる。「経験年数」では3～5年が29.5%と最も多く、全国レベルの大会ではある程度の修行年数が必要であるように感じられた。「魅力」については54.3%が子どもは魅力を感じていると回答しているのに対し、保護者は感じる39.7%、感じない33.4%と差がなく、興味が色帯以外（競技性など）にもあるように思われる。「統一に対する考え方」は、されるべきでないが14.2%と最も少なく、されるべき39.0%、どちらでも良い43.6%であった。今後の課題は、少年柔道が更に普及・発展するための一つとして級（色帯）の整備を検討する必要性があるものと考えている。

柔道の応用心理学的研究

— 柔道に対する Image の検討 (その 5) —

- 中島 隼、森脇保彦、山内直人、飯田穎男 (国士舘大学)
山本洋祐、田辺 勝、小嶋新太、藤田主一 (日本体育大学)

I. 目的

柔道は日本固有の伝統文化である武道の一つとされているが、篠原ら (1975) の調査報告に関して、「柔道は武道かスポーツか」という一般的な Image について調査研究を進めることにした。これまでの Image の調査研究では、講道館科学研究会が 1984 年に「柔道の普及と対策に関する研究」が作成されたものが頻繁に用いられているが、20 数年の年月が経過しているため、時代の影響なども考えられる。そこで本研究では、新しい質問項目を作成することを目的とした。

II. 研究方法

- 1) 調査対象者：調査対象者の総数は 932 名 (男子 430 名、女子 502 名) であり、全対象者の平均年齢は 22.9 歳、SD=9.89、年齢範囲は 18 歳～83 歳であった。
- 2) 調査材料：日本応用心理学会第 72 回大会 (2005 年) で報告した「柔道に対する Image 調査の検討(2)」において 4 因子を構成する 21 項目が抽出された。その 21 項目を新たな調査材料とした。(5 件法にて回答させた。)
- 3) 調査方法：調査は 2006 年 3 月から 5 月までの間に 6 大学の学生および東京都内在住の一般社会人に依頼し、各集団ごとに調査用紙を配布回収した。

III. 結果と考察

得られた資料はすべて得点化し、記述統計に続き相関行列を計算した後、不完全主成分分析を施し、固有値 1.0 以上の主成分についてノーマル・バリマックス基準による直行回転を適用して多因子解を求めた。今回はわれわれが選択した項目がより妥当性、信頼性かつ普遍性であるかを明らかにすることを検討した。

- ① 21 項目で全体群を因子分析した結果、全分散に対する累積貢献度は、56.6%で、6 因子が抽出された。
- ② 結果、それは「伝統」「文化」「伝統」「心」「技」「体」因子が抽出された。

IV. 結論

- ① 本研究の 21 項目の質問紙において「伝統」「文化」および「心」・「技」・「体」が抽出された。このことは、一般的な柔道はスポーツという Image でなく、日本が誇れる武道文化の一つである認識をもっていることが推測される。
- ② 注目すべき因子として、第 4 因子の中に谷亮子と嘉納治五郎が抽出されたが、後者は負の相関であり、さらに「柔道はスポーツである」項目が抽出されたことにより、**谷亮子の柔道 Image はスポーツに属し**、テレビや雑誌等のマスコミが作り上げたスポーツの象徴ではないかと推測される。また**嘉納治五郎については谷亮子とは対極的な位置**にあることが示唆された。
- ③ 今後は、日本だけでなく諸外国において調査研究することにより、柔道が日本だけの伝統文化ではなく世界共通の**普遍的価値のあるもの**であることを証明できるのではないかと考えられる。(なかじまたけし)